

2006年度 大谷大学教育後援会文芸奨励賞 「いま伝えたいこと」50字表現 入賞作品発表

今年度より、大谷大学教育後援会文芸奨励賞が創設されました。この賞は、在学生を対象に文芸作品を募集し、言葉による表現意欲を奨励することを目的にしています。

今年度は「いま伝えたいこと」をテーマに50字表現を募集し、143名の方から作品が寄せられました。選考の結果、次の方々が入賞され、去る11月12日(日)学園祭後夜祭において表彰式が行われました。

最優秀賞	眞壁孝治 (哲学科 第2学年)	
優秀賞	田島 遼 (哲学科 第4学年)	
佳作	大塚太一 (史学科 第1学年)	太古数馬 (国際文化学科 第1学年)
	堀内沙和佳 (哲学科 第3学年)	堀口雅幸 (哲学科 第3学年)
	山本千恵子 (文化学科 第1学年)	柚山彰子 (哲学科 第4学年)
	吉川和花 (幼児教育保育科 第1学年)	

〔最優秀賞〕

眞壁孝治

(文2・哲)

もう会えなくなる「ひと」がいる。その背中にまだ手が届く「いま」話したい。この大切な「きもち」。

〔優秀賞〕

田島 遼

(文4・哲)

こんなにしんどいのに生きるぜこのやろう！

〔佳作〕

大塚太一

(文1・史)

当たり前
食事は当たり前
携帯電話は当たり前
遊ぶことは当たり前
生きることは当たり前
当たり前って何んですか。

〔佳作〕

太古数馬

(文1・国際)

今の自分は昔よりも知識は豊富になった。

しかし、それ以上の何かを忘れてしまっている気がする。

〔佳作〕

堀内沙和佳

(文3・哲)

惰性で生きるのは嫌だから今はつらくても前に進む
いつか分かる
この道を選んだんだ
懸命に生きてやる

〔佳作〕

堀口雅幸

(文3・哲)

ことばの向こう側に
誰かがいること
ことばの真中に
心があることを
向こう側の誰かが
知っていてくれますように

〔佳作〕

山本千恵子

(短1・文化)

前向きな言葉は皆喜びます。
なので私も沢山書きました。
では、後ろ向いた思いは何処
で綴ればよいのですか？

〔佳作〕

柚山彰子

(文4・哲)

いつかは死ぬとわかっ
ていながら、この今、死なずに生
きている。なぜ？死を問いな
がら、生き続ける私。

〔佳作〕

吉川和花

(短1・幼保)

今はいつか過去になるから
会えなくなる時はきっとくる
私が今、あなたの隣にいるこ
とだけは忘れないでね

大谷大学教育後援会文芸奨励賞選考にあたって

今年度より大谷大学教育後援会では、学生支援事業の一環として文芸奨励賞を設けました。従来の学生の経済的支援である、特別貸与奨学金・家計急変奨学金・勤労学生表彰奨学金の奨学事業に加えて、学生の勉強意欲を高揚する一つの褒賞としての文芸奨励賞は文

科の大学として大きな意義をもつものであります。

今回『いま伝えたいこと』をテーマに50字以内で募集いたしました。応募いただいた143点の作品は、学生の生の声がひしひしと伝わってくるものばかりでした。学生という立脚地より、自分の信念、

大谷大学教育後援会会長 頼尊 聖

取りまく環境、両親のこと、友情のこと、将来のこと、殊に人間として生きることをテーマに、切実に伝えたいことを表現しておられました。ここに優秀な作品を発表し表彰いたします。

「いま伝えたいこと」講評

今回の応募作品は、全部で143編。表現形式は問わなかったのに、短歌から散文まで、いろんな作品がそろいました。

選考にあたって教育後援会会長と学内から3名の先生方に選考委員をお願いし、選考会を開きました。選考の際にまず留意したのは、「伝えたい」という熱い思いとその内容です。言葉にすることによって内にある思いがどのように外に現れているかを見ました。テーマには「誰に対して」ということは掲げていないので、自分自身に向かって伝えたい言葉でも良いのですが、単に独白やつぶやきと感ぜられるものは選外としました。

いま一つは、50字という限られた字数の中で、どれだけ端的に表現できているかにも留意しまし

た。単調では物足りません。かと言って、言い過ぎてくどくなったり、工夫しすぎたために分かりにくくては逆効果です。このような視点に立って、結果としては最優秀賞1名、優秀賞1名、佳作7名を選びました。

最優秀賞に選ばれた眞壁さんの作品には、さまざまな読み方を許す奥行きがあります。“もう会えなくなる「ひと」とは、恋人かもしれません。あるいは死をもって別れなければならない人かもしれません。いずれにしても大事な人であることが伝わってきます。また、その人と今なら話することができるという「いま」の大事さも伝わってきます。そして伝えたい「きもち」の大切さも伝わってきます。「きもち」の中身が示され

学生部長 一楽 真

ていないことが、かえって読む者の想像を掻き立ててくれます。

優秀賞の田島さんの作品は、短い中にも勢いが感じられます。「このやろう！」というのは荒っぽい表現ですが、そこにかえって生きることに向き合おうとする熱意が表れています。佳作の7作品について今一々のコメントは割愛しますが、生きること、死ぬことを見つめながら、読む者に問いかけてくる言葉となっています。

今回惜しくも選にもれた人も、また今回応募しなかった人も、来年以降も文芸奨励賞の募集があります。より多くの方に応募をいただいで、皆さんの言葉による表現がますます盛んになることを心より期待します。